

浄土

1979-8

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一冊 日曜有
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別掛紙版) 第三二五号
昭和五十四年七月二十五日印刷 昭和五十四年八月一日發行
第四十五卷 第八号



今日できることを

明日にのばすことなかれ

昔から我々がことわざとしていい伝えて来たものは、長い間に人間の智慧の泉から湧き出した処世訓として、洋の東西を問わず真理



の一面をたくみに書き出しています。そうしたことわざの中に「今日できることを明日にのばすことなかれ」という一句があります。なまけ、つかれ、気まぐれなどを理由に、今日してしまえば何ということのないことを、また明日という日があるさばかり投げ出し、おき、さてその当日になってあわてふためくという様な経験は、誰にもあることです。このことわざはヨーロッパのもですが、実は南方仏教の經典の注釈書の中にも伝えられているのです。

或る時、ブッダは、弟子たちと共にシユラヴァステイーに居られました。弟子の比丘たちはブッダの教えを守り、森に入って禪定の修行にはげみ、阿羅漢果を得ましたが、一人の比丘だけは、いずれは自分もその地位に達するからとして、仲間の忠告にもかかわらず修行を怠っておりました。しかし仲間たちが

阿羅漢果を得て次々に森から出て行くのを見て急に心細くなり、かくなる上は夜も眠らずに禪定にはげみ、短い期間で阿羅漢果を得ようとして睡魔と闘いながら禪定・経行につとめました。というとうとうとして本堂の廊下の端にある石の板に衝突し、足の骨を折ってしまいました。大きな物音を聞いて比丘たちがかけつけ、一晩中かいほうしましたが回復は、はかばかしくなく、遂に阿羅漢果を得ることもできませんでした。一方、看護に当たった比丘たちはそのために次の日の朝、托鉢に赴く約束をした信者の家に行くことが出来なくなりました。ブッダはこの話を聞いて次のように述べられたということです。

先になさるべきことを、あとまわしにしてしまう者は、ヴァラナの緑の木を切ってしまってから、あとでくやむ者と同じである。立つべき時に立たないものにとつては、若さも、力もなんの役にも立たない。意志が弱く、懈怠の者は、智慧の道を見出すことは遂にないであらう。

(佐藤良純)

八月号



選択とは、すなわちこれ取捨の義なり。謂わく、二百一十億の諸仏の浄土の中において、人天の悪を捨て、人天の善を取り、国土の醜を捨て、国土の好を取るなり。

——『選択本願念仏集』

(定本法然上人全集1 P.43)

目次

法 話

こころのふるさとを求めて……………森 田 和 郎……(2)

特 別 寄 稿

敦煌の人びと……………上 住 節 子……(4)

〈随想〉ほとけとの出会い(三)……………佐 竹 隆 三……(10)

〈連載〉

六時礼讃の「無常偈」に生きる(5)……………安 居 香 山 ……(18)

＝スリランカの旅より＝

満中陰の功德……………山野井 貫 琇……(14)

児童のための国際年

—児童福祉と教育—……………森 邦 夫……(28)

法然上人の弟子たち⑫

津戸三郎為守のこと〔八〕……………梶 村 昇……(21)

浄土句集……………一 田 牛 猷 選……(26)

〈表紙裏・巻頭言〉 今日できることを明日にのばすことなかれ

念仏ひじり三国志④ —法然をめぐる人々……………寺 内 大 吉……(34)

表紙 久住静雄画

カット 大正大学美術部

おぼん法話

こころのふるさとを求めて



森田和郎

(歌人)

八月は旧盆の季節であります。先き立った子供が、両親が、ご先祖さまが懐しいわが家へ帰ってくる月です。

若ければ道行き知らじしなへ幣はせむ

黄泉の使負ひて通らせ

万葉集にでてる山上憶良の歌ですが、この意味は、「年もいかない若い者だから道も知らないだろう。贈りものはしますから、死の国の使いよ、背負って通らせてください」ということでしょう。

子を亡くした親の願いが切々とひびいてくる歌であります。万葉の時代も、今の時代も人の親の心には変りはありません。

「はやく生まれかわって、またお父さんのところへ生まれてこいよ」と、小さい棺にすがって衆人環視のなかでかきくどく若い父親や、声をあげて泣く母親の深い嘆きの前では、ただおろおろするばかりで慰める術を知りません。まことに、子供の死顔は純であって美しいもの

です。胸の上で組み合わされた小さい手は、痛いほどの悲しみを見るものにあたえます。そこには世俗のけがれを知らない、真実と清浄があるからでしょう。

大人の死と子供の死とは、本質的に変るものではありません。とするならば、わたしたちの死も、生まれぬ前に還ることになるのではないのでしょうか。だからよかれあしかれ、その世界は、わたしたちの「ふるさと」であることだけは確かだという気がいたします。

現代の日本人の奇妙な習癖の一つに無宗教であることを誇りにするということがあります。しかも知識人ほどそれが多く感じられます。なぜそのような風潮があるかといえますと、宗教というものは愚痴蒙昧の者の妄信、迷信にほかならないという偏見に立っているからであります。なるほど、宗教の名のもとに恐るべき迷信、邪宗の存在することも否定することはできません。

病気をなおすための宗教、金もうけのための宗教、災難を逃がれるための宗教など、世のなかには数多くの類いの宗教がそれであります。

真実の宗教とは、いくたの宗教的天才たちが生涯を奉

げての求道のすえに、心証した自然の理法そのものということができます。

わたしたちの先祖が、「おかげさま」「もったいない」という言葉であらわしてきた「大いなるもの」に対する畏敬と謙虚な心を失いつつあるともいえましょう。人間が最高の存在であることが、そのまま自己が最高であることであり、人間性の尊重ということが、そのまま本能的衝動の無条件肯定につながってきているのではないのでしょうか。可愛い子供を平気で絞め殺したりする。人の命を虫けらのようにしか思わない。ぞっとするようなことが日常茶飯事となっている恐しい現代であります。子を亡くした親はかならず手を合わせて頭を垂れています。その深い悲しみの姿は見る人の心を打つのでありますが、しかしそれは単なる悲しみだけででしょうか。それだけではないように思えます。合掌には、もっと根源的な人間のあるべき真実の姿があります。

子を亡くした親は、悲しみのなかから合掌念仏の心を知るのです。それは、あらゆるものに限りある人間が無限のなかに生かされている真実の姿を感じたことにほかならないのであります。

特 別 寄 稿



敦煌の人びと

上 住 節 子
(玉川大学助教授)

一、砂漠への旅だち

十五名の、私たち「仏教美術友好訪中団」が、北京を経て蘭州から敦煌へと旅だったのは、四月十四日であつた。



—沙州城跡に立つ筆者—

北京から蘭州へ千キロ、空路四時間の蘭州から柳園まで八百数十キロ、ウルムチ行き特別寝台車で二十六時間。ここま

で来ると、茫漠と続く黄土色の風景は、何時間たってもいっこうに変わらない。途中駅の酒泉で求めた「夜光杯」に赤葡萄酒を注いで、まだ見ぬ敦煌に「乾杯」「乾杯」をくりかえす。

柳園に着いたのは、十五日の午後であつた。たちまちの人だかり、歓迎の音楽。ドラや拍子木にまじって声高な女性の唄声——まさに西域だ。

午後七時十分。それでもまだ陽は高い。マイクロバスで、いよいよ敦煌に向けて出発。シルクロードを一路南進。ゴビの砂漠がその全貌をあらわす。

途中一〇キロの地点で黄色の標識に出合う。治密二九七キロ、敦煌一二八キロと書いてある。玄奘三蔵が大変苦勞されたあたりだ。バスを降り、しばし立ちつくして治密の方角を眺める。マルコ・ポーロは、「東方見聞録」

で当時のこの辺の状態を、夜間砂漠を跋扈する悪霊の所作は酷いもので、命を落す者も少くなかったと記している。

砂漠——それは、茫洋として果しない優しい春の海のようにであり、また、いきものを一切寄せつけない、途方もない灰色の世界にも見えた。二つ三つ散在する小さな砂の墓は誰のものとも分らず、砂塵に吹かれ、土に帰っ



—鳴沙山と駱駝—

て行く人間の貌を象徴しているかのようであった。

突然、もうもうとした白煙が、煤煙の匂いをさせながら、バスの天窓から流れ込んできた。五〇メートル先も見えない霧の中を走っているようだ。このあたりは、「風の口」と

呼ばれる。

四キロも続く砂嵐を潜り抜けて暫く行くと、やがて行きかう駱駝や車の数が徐々に増え、十時半、私たちは目的地敦煌に着いた。

二、敦煌の街と生活

敦煌は、東西文化交流の接点である。英米文学への東洋思想の導入を研究のテーマとしてきた私にとって、敦煌の人びとが、長い歴史の変遷と革命を経て、今日、どのような生活をし、どのような考えを持っているのかは、非常に興味ある問題だった。仏教学専門の先生方の訪中団に、門外漢の私が参加させて頂くことになったのは、それらを自分の目で直接確かめたいためであった。

シルクロードが賑わった頃の敦煌の街は、今日の市街から西南約五キロの辺りにあった。そこには、いまでも節度使（敦煌郡の郡長）の城跡が、城壁のほんの一部を残して畑の真中にあり「沙州城旧跡」の標識がたっている。

周囲には、明るく輝く鳴沙山をバックに、見渡す限り遮るものもない広々とした畠がひろがり、農夫が牛に馬鞍をひかせている。真赤な頬をしたおさげ髪の娘さん

ちが、にこにこ手を振っている。きらびやかな仏教都市として榮え、チベット青海路を旅するキヤラバン隊の宿場町として賑わったかつての敦煌を想いおこすには、あまりにものどかな情景であった。

現在、敦煌の人口は七万といわれている。駱駝や驢馬の往来する幅広い道路、街の中心部を流れる灌漑水路、煉瓦と土で固められた平屋建の家々、茶色の土壁の側で戯れる鶏や黒豚、四方からの砂塵に吹かれて変形した道端のボブヤや榆の枝々——街も、畑も、すべてが四次元の世界に迷い込んだかと思うほど、砂漠の色一色に蔽われている。それは最初、都会育ちの私に、何かいいような不安と苛立ちを感じさせた。

この地方の建築物には欠かせない煉瓦工場と、製粉所とは比較的多く、農業とともに人びとの生産活動の中心となっている。街内にある唯一の「敦煌向阳中学校」——ここでは、下級中学と上級中学が一所にある——を訪問した際、中三の卒業生のうち三〇パーセントは、これらの工場や農場で働きたいと希望していると聞かされた。ちなみに昨年は大学を受験した百名のうち、七名が合格したとのことだった。門や壁に、「自主独立」、「学

習学習再学習」など、赤文字で書かれたスローガンが目につく。

街のメイン・ストリートの両側には、病院と映画館もあり、自転車修理店、外に椅子を持ち出して客の髪を刈っている床屋さん、朝食の揚げパンを売る小さな店なども並んでいる。二、三十分も歩くと畑と砂漠が広々と開ける。

私たちの宿泊所は街の中心地にあり、白壁に囲まれた、数棟のこじんまりとした平屋建ての建物であった。朝七時、中庭の木に吊された鐘を誰かが打つ。それが始業の合図だ。部屋には、土間に鉄製のベッドがおかれている。簡素なものだが清潔で、家庭的な雰囲気の中で過ごすことが出来る。真白な上っぱりを着た若い女性が二人、いつでもジャスミン茶を飲めるように用意をしておいてくれる。

彼女らは毎朝夕、洗面用のお湯を器に入れてくれたりしたが、動作が淑やかでしかも甲斐甲斐しく、忙しいスケジュールをかかえた私たちの意向を、よく読みとってくれる。その一人はピンクのリボン結び、まだ十八・九歳かと思われたが、二十五歳で、子供もいると聞いて



一鳴沙山と月芽泉一

驚いた。彼女の父親が、宿泊所の料理長さんである。料理は丹念に作られており、種類も量も豊富で、私たちの食欲を一層盛んにしてくれる。彼は、敦煌名物の拉麵作りを一度だけ私たちに披露してくれた。もちろん味は薄い塩味で、上々の出来ばえだったが、麵が非常に長いのが特徴的だった。それは長寿を意味し、誕生日の食物でもあるという。



—敦煌文書を発見した王道士の墓—

大人たちの服装は、ここでもブル一色だ。しか

し、北京などの大都会では、せいぜい五・六歳以下の幼児だけが色物の上着を着ていたのに、ここでは中学の女生徒たちまでが花模様の上着を着ている。楽しい驚きだった。おそらく、西域文化の影響なのであろう。

子供たちは、大変に人なつこく、愉快だ。ある晩、団員の先生方三人で散歩に出かけ、偶然小学校の校庭に迷いこんでしまった。子供たちがぞろぞろと集ってくる。

カメラを向けると、キャツと言って飛びすぎる。が、又「怖い物」みたさに近寄ってくる。ふと見ると、青いスモッグを着た、小柄な、優しそうな中年の女性と一緒に立っていた。微笑んで、握手を求め、手まねきで私たちを教員室に招き入れてくれた。控えめなこの女性は、向陽小学校の副校長さんであった。

四・五人の先生方も加って、教科書や生徒の作文などを見せてくれる。この間、子供たちは、せっかく自分たちがみつけた「面白い人間」をもっと見せろと言わんばかりに、

力一杯ドアをたたきやら、窓から鈴なりになって覗き込むやらだ。一方、先生方は少しも動ぜず、ジャムの空瓶利用のコップでお茶を出してくれた。先生方は、明日も又来て、是非子供たちの学習状況を見て欲しい、と言う。帰り道、子供たちは、どこまでもついできた。宿泊所の門をくぐった後も、「バイバイ」という可愛らしい声が、いつまでも聞こえていた。

鳴沙山は、街の比較的近くから登ることができる。車で三十分も走り、畑の畦道で車を降りると、真紅の鞍をおいた駱駝が数頭待っている。駱駝の背に揺られながら、幾重にも砂山の連なる鳴沙山の麓まで行くと、文字通り、砂漠の中のオアシス、月芽泉が、突如、深緑の水を湛えて出現する。誠に壮観である。泉のほとりには木影すらないが、往時は、たくさん道の教の寺院が建ち並んでいたといわれる。

太陽の照りつけるさなかを、砂と格闘しながら頂上まで登りつめると、丁度遊びに来ていた若い恋人たちに出会った。十六・七歳ぐらいに見えたが、実際は二十一・二歳の同じ職場の男女であった。結婚は何時?と聞くと、後三年ぐらいたって、皆に、良い夫婦になれると認

められてから……という。敦煌の理想のお嫁さんは、丈夫で料理と裁縫が上手なこと、子供は二人ぐらいまで、ということだった。理想の夫は?という問いには、下を向いて赤くなってしまった。二人とも大変恥しがりやだ。中国の女性は、お化粧をしないので若く見える、とよくいわれるが、彼女たちの心の純真さ、優しさが、いつまでも若々しく、女性的な態度をたもたせているのであろう。敦煌の人びとは、陽に焼けて、健康だ。表情は屈託がなく、無邪気なほどに素朴である。彼らとの触れ合いは、爽やかな感銘と、私の心の中に今もなお残している。

三、千仏洞

かつて、千仏洞は、敦煌の人びとの信仰の中心であった。

四世紀の中頃、楽傳法師が金色に輝く三危山の山なみを見て発念し、座禪の道場を造るべく、石窟を掘り始めたのが、千仏洞（正式には莫高窟）だと伝えられている。その後千年、北魏、隋、唐、五代、宋、夏、元にわたって、信者たちによって石窟は拡大され、全四九二窟、仏像二千体、壁画総面積四万五千平方メートルという、大

規模なものとなった。

窟内には、仏像と一体化して、ところ狭しと壁画が画きつらねられている。仏教の変相図にまぎって、花や、供物を捧げもつ供養人たち、今も変らぬ歟を使って農耕にいそしむ農夫たちなど、人びとの日常生活が、実にリアルに描かれている。彼らが敦煌の人びとの先祖たちなのであろう。



—千仏洞—



—莫高窟—

私たちは、最初に参観した第二七五窟、交脚弥勒菩薩像の宝前で、壬生台舜先生の御指導のもと、般若心経を御供養させて頂いた。

今日、千仏洞は、文物研究所の手で管理されている。平素は、森閑として敦煌の人びとが訪れることもない。しかし、私には、幾世代にわたる信仰の蓄積が、今なお敦煌の人びとの心の底に生きつづけていて、それが、彼らの素朴で清純な日々の生活を支えているように感じられた。

私は、敦煌の人びとに接しつつ、西方浄土をみる思いであった。



—交脚弥勒菩薩像(莫高窟328窟・盛唐)—

〈随想〉

ほとけとの出会い (三)

佐^さ竹^{たけ}隆^{りゅう}三^{ぞう}

(大正大学教授・医博)



さきにも述べましたように、癌研付属病院の病室での「癌ノイローゼ」という絶望的な状況からわたくしを救ってくれたのは、増谷文雄先生の『仏教概論』という一冊の本との出会いであります。それは、真の意味での「ほとけとの出会い」であり、「仏教との出会い」であったわけであります。

これを契機として、わたくしの「仏教への傾倒」(わたくしの友人の表現に例えれば、「仏教への危険な傾斜」)がはじまり、筑摩書房刊『現代人の仏教』(全十二巻)、角川書店刊『仏教の思想』(全十二巻)を通読し、仏教に対してわたくしが抱いていた誤解や宗教

一般に対する偏見は一掃され、「人間開眼」という新しい道がわたくしに開けてきたのであります。それまでのわたくしは、医師として、多数の他人の死を見聞したにすぎず、死を主體的な絶対的な間いとして解決するように迫られたことはなく、したがって自らの死にたいして真剣に考えることはなかったと言わなければなりません。つまりそれまでの「死の考察」は底の浅い、甘いものであり、したがって「死生観の確立」とはほど遠い状態にあったればこそ、癌研付属病院病室で絶望的な危機場面を迎えたことは当然であります。

他人の死を見聞することによって、死というものは避けがたい事実であり、自分もやがていつかは死ぬだろうと考えてはいますが、それは自分自身の経験ではありません。経験しえないという意味で、死は、少くとも自己の死はつねに彼岸であり、漠然とした未来に属する事象であります。

したがって、自我心理学的には「自己の死」はありえないと言わねばなりません。何故ならば、どんなに死に近づいても、どんなに死の不安を感じたとしても、死はつねに未来にあるものであり、死んだ瞬間には一切の意識現象は消失しており、知覚し判断する主体そのものが無いのですから、「自分が死んだことを経験的に知ることとは不可能である」からであります。

それ故に、死は経験に即して言えば非経験的なものであり、単なる観念であり、他人の死を媒介とした「対象的な認識」であるにすぎません。死というものとは実体ではなく、もし死を実体と考えるとしたら、それは人間の錯覚というものでしょう。

「自己の死はない」という自我心理学的確信が、

わたくし自身胃癌のために死ぬかもしれないという緊急の不安と恐怖によってもろくも崩れた時、わたくしははじめて死を主体的な絶対的な間いとしてみずからに引受けざるをえなかったわけであります。

わたくしの場合、結果的にいって胃癌ではなかったのですから、死の不安は偏執性不安にすぎず、単なる取越苦労にすぎなかったわけですが、それは第三者の客観的な見方というもので、癌ノイローゼ状態に呻吟していた当時のわたくしにとっては、客観的事実と同じ意味をもつ心理的事実として迫ってきたのであります。

ともあれ、主体的解決を迫った胃潰瘍という病気は、実は神の恩寵のごとく仏の慈悲のごとく有難いもので、真の意味における精神の健康へとわたくしを導いてくれた妙薬のようなものであったというべきであります。

それまでの不遜な自然科学者のわたくしは死に、謙虚な人間に生まれかわったという確信をもつことができました。と同時に、病気を単なるマイナスと考へ、取除かねばならない欠陥とみなす機械論的な

考えは是正されるべきで、病氣は新しく人間学的に考察されねばならないということに気づきました。

これは大きな余録であり、医師としてのわたくしにとつて、まさにコペルニクスの転回を意味するものでありました。

このような心境の変化がどのようにして起ったか、いかにして可能であつたか——実はわたくし自身にもはっきりわからないのでありますが、できるだけ当時の状況を想起して跡づけてみたいと思います。

さきに、絶望的危機の状況という表現を用いましたが、よく考えてみますと、自分だけは助かりたいというきわめて自己中心的なエゴイズムと、これといった学問の業績や成果もなく朽ちはてるのはいかにも残念であるという——生に対する未練、執着が強く、このままでは死んでも死にきれないという思いがつのるばかりであつたようです。

しかし、一方では、どうもがいても近い将来に癌で死ななければならぬ運命であるとすれば、もつと落ついた心境で死を迎えたいという願望もありま

した。このような不安と願望との交錯した日々なかで、せめて静かな落ちついた心境で死を迎えることはできないものであらうか——と次第に考えるようになりしました。

「朝に道を聞けば、夕に死すとも可なり」——孔子の言葉がこの時ほど痛切なひびきをもつて胸に迫ってきたことは、今までになかったようです。

夕光のなかの土蔵の白壁を背更に西方浄土を拝む祖母の像が時折脳裡に浮かび、気がついた時には「南無阿弥陀仏」と一心に唱えていることも屢々ありました。祖母の姿が何故繰返し繰返し想起されるのか、自分でも不思議なくらいでした。

仏教への接近、ほとけとの出会いは、今から考えますと、父系の祖母の導きによるものと思われませんが、幼時体験のもつ意味の重大さに驚くほかありません。偶然手にした増谷文雄先生の『仏教概論』の一冊の本との出会いは、わたくしの人生に決定的な転回をもたらすことになりました。

「仏教は相對主義の立場をとる」という最初に提出された命題に、まずわたくしはびっくりしまし

た。科学は相対主義をとるが宗教は絶対主義の立場をとるものと思いこんでいたわたくしにとっては、非常な驚きであると同時に、ハッと眼が覚めたような思いがし、今まで仏教の本質を誤解していたわたくしの愚かさ——はかりしれぬほどの大きな愚さに気づきました。

「縁起」というのは「相対性の原理」にほかならないことを理解した時、心のなかの不安の雲がさわやかな風によって吹きはらわれたようであり、長い苦しい闇のなかにあたたかい光明を見出したように、感謝の気持で一ぱいでした。

「仏教はリアリストの思想である」、「仏教は東洋的ヒューマニズムである」、「仏教教団は善き友のあつまりである」——これらの提言は、わたくしにとって何の抵抗もなく受け入れられる言葉であり、仏教に対するわたくしの誤解がいかに大きなものであったかを反省させられました。と同時に、大きな喜びを感じ、次第にわたくしの心はゆたかになってゆくような気がしました。

ブッダはいわゆる「絶対者」ではない。みずから

神格化されることを拒んだ「人間」であり、生きとし生けるものの師たる人という意味での「偉大な教育者」であつたというべきであらう。ブッダをこのように理解した時、わたくしはもっと仏教の教えを知りたいとひたすらに願うようになりました。

「縁起」が仏教の中心思想であるか否かは別として、「無常」の原理や「無我」の原理がその基盤の上に樹立され、「中道」という実践の原理がそこから導かれるように、わたくしには思われるのであります。キリスト教が徹底して「神の宗教」であるのに反して、仏教が「人間」の宗教であることを発見した時、何故もつと早く、もつと素直な気持で仏教に接しなかつたかを後悔しました。

数日間朝から夜まで『仏教概論』を読み続け、乾いた海綿が水を汲み込むように、理解できる限りのことを吸収し、読み終った時、病気のことを忘れ、死を恐れていたことすらも忘れていたことに気がつきました。胃の痛みも消失していることに気づき、癌ノイローゼ状態から完全に脱出している自分を見出したのであります。

(つづく)

|| スリランカの旅より ||

満中陰の功德

やまのい かん しゅう
山野井 貫 琇

(元長野市更北仏教会長
長野市常然寺住職)



私は過日ふとした機会でスリランカへ旅することができた。以前から望んでいたので勇躍出発した。一週間の旅であったが、この国では有名なキャンデー・シギリヤ・ポロンナルワ・アヌダラプーラ等の町々をひと回りできて本当に嬉しかった。その中でも特に仏歯寺の最奥釈迦の歯が入っているという、宝石で散りばめた美しいストゥーパ。五世紀に描かれセイロン美術の最高といわれるライオンロックの乙女の壁画。ガルビハラ寺の岩山に彫り出された三体の巨大な仏像。スリランカ最古のイスラムニヤ寺やルワンベリ仏塔。世界最古の聖なる菩提樹など。黙想しても目の辺り今でも浮かんで独り悦に入っ

ている最近である。その他にも私の期待した数多くの仏教遺跡、遺品等この目で実際に拝観することができて、印度仏教遺跡巡りに次いで近年にない偉大な収穫があったのである。小乗仏教のこの国に二千五百年前の釈迦の教えが未だ脈々として伝わっているのを見た。昨年中国を訪れた際に仏教遺跡こそあれども仏教精神は中国人大多數の心の中に存在していないのには随分と幻滅の悲哀を感じたが、このセイロンにおいては釈迦の教えが、現地ガイドを始めとして国民の心の中に生きていることを見ることができて本当に満足したのである。

このような旅の中にあって、私の心を揺がした一人の

老人がいたことを紹介したい。

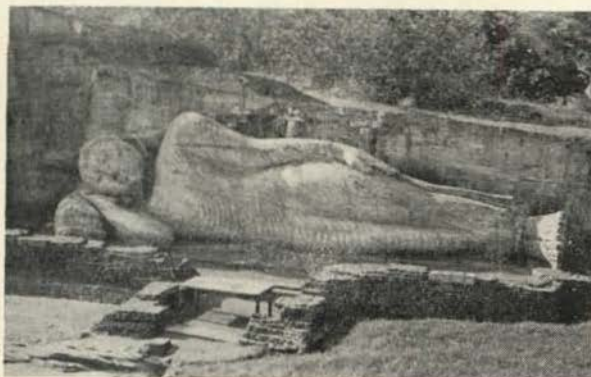
成田空港出発の前夜は御多分にもれず、近くのBホテルに一泊して翌早朝ロビーに集合した。その中に茶人帽を頭にした一人の老人がいた。独りぼつねんと腰を掛けて同行者がいるようでもなく、もの静かな態度でいかに



— 仏歯寺と街道 —



— ライオンロックの乙女の壁画 —



— ガルビハラ寺の仏陀石像 —

も心の中が満たされた年令七十余歳格好の好々爺である。私はこの茶人帽の老人が最初から目に止まった。薄い髪の毛も分けていたので、真宗の坊さんか茶人でもあるかに思ってみた。やがて目的のセイロンに着いて、最初の仏教関係寺院は仏歯寺であった。薄暮に入山した同

寺はすでに山内は暗く、電灯や灯明を頼りに参拝した。

らっばやどらや太鼓の奇妙な音楽に誘われて進んでいく堂内はエキゾチックで見るものすべてが私の心を踊らせた。二階では宝石造りの小さな仏陀像を拜んだ。誰かが私の後ろから奉賽した。私は拝み終って後ろを振り返ったところ、この老人は合掌をして懸命に祈っている。しかも肩からは抱茎荷の紋の入った輪袈裟が掛けられている。私たち一行はバス二台で七十人余りであったが、このような姿をした人は他には一人もいなかった。私も数珠だけは手にしていたが、この老人の姿には敬意を深め、以後心なしかよく私の目に映るのである。仏教寺院や遺跡では必ず輪袈裟を掛け何がかの奉賽をする。そして独り静かに合掌し、とほとほと団員の中に混じって行動し、人先も争わなければ決して遅れて人に迷惑もかけない。常に満足そうなるその風彩は次第に私の脳裏深く刻み込まれていった。

そしてこの旅の最後の夕食はホテルにおいて野外パーティーが催された。夜の木々には豆球が輝き、木から樹へ引き渡された綱にも色とりどりの電球が吊り下げられ、円卓は各九人でこれを囲み、数日間の最後の誼みを

結び、知らない者同志が互いに心の底を割って話し合ったのである。その際ちょうど私の左にこの老人が席をとった。これも仏縁と私も喜んだ。食事が進むにつれてこの老人は次のような身の上話をしてくれたのである。

私は東京板橋に住む水道工事屋なんですよ。息子ももう相当な年になって一切の切り盛りをしてくれるので、私は社長の名ばかりです。現在はこうしてどこへでも旅行し、いつでも好きなことができる結構な身分になりました。若い時分はギャンブルはやる、女は買う、そして儲けのためには随分と非道なこともやってきたもんです。今考えてみれば家内も随分泣かせて、よくもまあここまで生涯が送れてきたものだと思議なくらいです。ところが数年前に家内を亡くしました。その時は今までの元氣はどこえやら、身に染みて淋しさを感じ、幾十年か忍従の生活をしてくれた家内が本当に不憫で、矢も楯もたまらず後を追って自殺しようかと考えた。そして初七日の夜菩提寺の和尚さんにこの気持ちを打ち明けたのです。すると和尚さんは、あなたの気持ちはよくわかります。だが今は死ぬ時でない。あなたにはあなたに与えられたこの世でなさなければならぬ使命がまだ残ってい

る。せめて満中陰までは奥様のご冥福を祈ることもその一つなのです。無障礙に奥様を極楽に送ってこそ奥様もお喜びになり、あなたも救済されるというものでしょう。明朝から仏壇の前に座して、五分でも十分でもいいから木魚を叩いて念仏を申しなさい。とつくづくと説き教えられて実行してみた。それ以来毎朝念仏の生活が始められた。心の雲は次第に晴れて、五七日頃の念仏は二、三十分くらいに延び、満中陰の頃はすっかり心が落ちついた。み仏から与えられたこの尊い命。命ある限り生き延びて妻の冥福を祈り、少しでも良いことをして社会の



— 仏歯が収められているストゥーパー —

多くの人々の為に尽くす。このようなことに勇気を出すことが私に与えられた使命なのだ。このように考えるようになった現在は本当に幸せですよ。仏と話して折があればこのように仏陀の遺跡を尋ねて仏と接することのできるのは無上の喜びですよ、と

ざっと右のような話の内容。私は非常に興味をもって聞きほれ敬謙の念につつまれた。現在の私は高校教師生活三十八年も定年退職の身、年令すでに六十も過ぎた今日であるが、これからが、自分にとって本当の使命が全うできる生涯が送れるものをつくづく思う昨今である。



— ルクンベリ仏塔 —

■ 六時礼讃の「無常偈」に生きる ■

— 五 —

— 中夜無常偈 —

安^{やす}居^い香^{こう}山^{さん}

(大正大学教授・文博)

○

日没・初夜と終ったところで、いよいよ中夜の「無常偈」に入ることになります。世間のさわがしさも、もの静かな夜へと移って行きます。そんなとき、次のような「中夜無常偈」を唱えることになっています。いつものように、先ずその文を掲げてみることに、いたしましょう。

汝等勿抱臭屍臥 汝等臭屍を抱いて臥することなかれ
種種不浄仮名人 種種の不浄を仮りに人と名づく

如得重病箭入体 重病を得て箭の体に入るがごとし
衆苦痛集安可眠 衆の苦痛集まる安んじて眠るべき

一体この七言の詩は、今までかかげた詩句とは、大分趣が違います。四句の簡潔さもさることながら、何か屍切れとんぼのような気がしてなりません。そして、内容そのものも、何か無気味なものさえもあります。そして今まで見てきた「無常偈」とは、一風変わったところがあります。とも角、いつものように、この詩の和訳を、大木惇夫さんの訳でみてみることにいたします。

腐^{くさ}りて臭^{くさ}きしかばねを

それとも知らで 自^{みづか}らに

抱^{いだ}きて臥^ふすることなかれ、

不^{けが}浄^{じやう}を仮^{かり}りに人^{ひと}と言う、

重き病^{やま}いを得^えたる身^みに

さらに毒矢^{どくや}の入^いるごとし、

苦^{くる}しみ多く集^あまれば

などや安^{やす}らかに眠^ねるべき。

「中夜無常偈」というようなものは、私も余りあげたことがないだけに、この原稿を書くにあたって、改めて拝読してみても、ギクリと胸にささる無気味さを、感ぜずにはいられませんでした。とくに第一句の「臭屍を抱いて臥することなかれ」という句のときは、何か夏の夜の怪談を思わせる恐ろしさがあります。

中国の唐宋時代に、伝奇小説とされる類のものがあります。この中に、この句を地でいったような話が、数多くでてきます。

或る旅の男が、日もとつぷりとくれた夜道に疲れ、とある小堂をみつけます。ここで一夜をと休んでい、ますと、見目うるわしい一人の女性が、この小堂に入ってきてます。たちまち情炎をおこしたこの男は、この女と愛のちぎりを結び、抱いて一夜をあかします。ところが、朝になって目をさましてみると、抗^かっていた女は、閻^{えん}魔^まであったのです。

人間の色情の、あくない食欲をよくあらわした小説です。しかし、私達は、いつもこうした食欲のとりこになっていることを、否定できません。人間とは、こうした不浄のかたまりに外なりません。そうした私であることを知りながら、尚かつ、深い淵に落ち込んでいくのです。それは丁度、重病人に、更に矢がささったようなもので、人間の哀れなあまじさが、まざまざと、この句の中にえがかれていきます。

こうした本能の五欲に駆^かられている私達には、まことに苦しみが多くて、安らかに眠^ねることもできません。

私達は、人間の煩惱の深さを、知識として知っているはずで、それでいて、悪の世界に、自から墓穴を掘^ほっていくこと、しばしばです。毎日の新聞の社会面をみると、まるでそこは、地獄絵のようなできことが、毎日紙面をにぎわしています。人ごとのようにみえますが実は、又自分自身にも、大なり小なり身に覚えのあることもあって、慄然とします。

ところで、この無常の偈は、そうした人間の赤裸々な姿を、余りにもあからさまに、しかも無気味に表現しています。無常への認識を、善導大師は、こうした形で、

まことに直接的に示されたわけです。今までの花や、ともしびの例とは、比較にならぬ、生々しさがあります。それだけに、人間のみにくい姿が、ありのままに示されていて、空恐ろしいものがあります。

この中夜の「無常偈」は、実のところ、『大智度論』の中にある文と、殆んど同一の文であって、大師はそれをそのまま、ここに引用されているようです。大師自身、生々しいこの文に、心引かれたからに外なりません。しかもこれが、中夜の時にあげるものだけに、よくいに空恐ろしい気迫を感じずには、いられません。

それにしても、ここでは、善導大師ご自身の感想なり、意見なりが、一つも入っていません。今でまみてきたところからすれば、必ずと言ってよいほどに、「だからこそ、自戒して、精進せねばならぬのである」と言った調子の語句が最後に入ってくるのですが、これに限っては、現実の生々しさを指摘だけして、後は読む人の判断なり、反省なりにまかせたという感じがあります。

こうした所などからみると、善導大師の特異なご人格が、そこに見られるようになりません。前にも述べましたが、大師は、性格的に相当厳しい方であったように思

われます。又、人生に対して、極めて積極的な方であったと、私なりに推察しています。そうした強い性格が、この句を、『大智度論』のままだにほりだして、われわれの前につきつけられたものと、思うのです。

この五月末から六月にかけて、私は浄土宗の「第二次日中友好浄土宗の翼」の一団員として、中国を訪問してきました。そして、玄中寺や香積寺にねんごろに参詣してきました。その時、石壁玄中寺の厳しい自然、そして広大な原野の中にある香積寺などを参拝しつつ、遠く善導大師の時代を追懐し、そのご人格を追慕していました。そうした中でも、大師の厳しいご人格を、推察しないわけにいきませんでした。

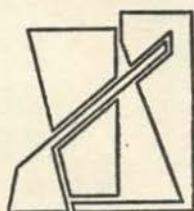
今ここで、「中夜無常偈」の、生々しい表現や、内容を見るにつけても、それが『大智度論』の文のそのままの引用であるとしても、こうした文を引用せられた大師のご人格に、思いを致さないわけにはいきませんでした。

それにしても、なんと罪深いわれわれの救い難い、醜い姿であることではありませんか。そして、自分のか弱いこの人間では、どうしようもない無力感を、ここに感ぜずにはいられぬ次第であります。

(つづく)

法然上人の弟子たち ⑫

津戸三郎為守のこと [八]



梶村昇 かじむらのぼる

(亜細亜大学教授)

いよいよ為守の最期のときがきた。仁治三年（一二四

二）十月二十八日、彼は三七二十一日間の別時念仏を始めた。十一月十八日結願の夜半、道場のあかり障子の中で、高声念仏数百返を称えたあとで、ひそかに腹を切った。そして五臓六腑をとりだし、それを幅広の練絹につつみ、小さな子供をよんで、後の川に捨てさせた。真夜中のことなので、このことを誰も知らなかった。

この後で、彼は僧衆を集めて、こう言った。

「私はこのように出家籠居して、故大臣実朝公の菩提をとむらってきましたが、それにつけても、主君がますます恋しく思われますし、また、法然上人も、必ず極楽においでなさいと仰せられましたのに、今まで極楽へも行

かずに、この世に生き長らえてきました。これ以上穢土に住むことは、いずれにしても無益なことです。積尊も八十歳でお亡くなりになりました。法然上人も八十歳で極楽へ行かれました。尊願（為守自身）もまた満八十歳です。第十八願は阿弥陀仏四十八願中の念仏往生の願です。今日はまた十八日です。別時念仏の結願の日に当りますので、このような日に往生したならばすばらしいことと思います。」

僧衆は、為守が腹を切っているなどとは思ってもよらなかったし、ただ「こうありたい」と願っての言葉であらうと思つて、「それはすばらしいことでしょう」と答えた。

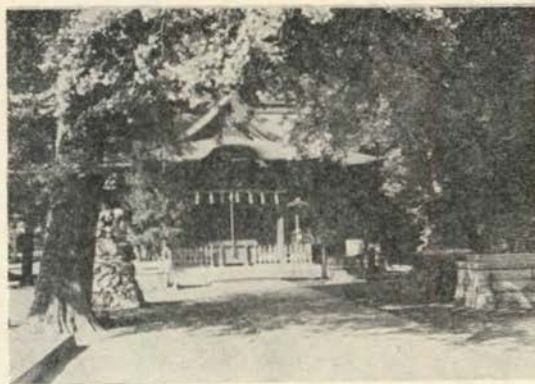
その夜も明けて十九日になった。別に苦痛もなく、直ぐ死ぬようにも思われない。そこで為守は、子供の民部大夫守朝をよんで、切った腹をあけて、「まる肝というのが、まだ腹に残っているので臨終が延びていると思われる。近寄って見てくれ」と言った。そこで初めて人々はこのことを知った。守朝は近寄って「心臓の前ところに、円いものがあります」というと、為守は手を入れて、それを引き切り、投げ捨てて、「これが残っていたから臨終が延びたのであらう」と言った。

人々は驚き慌てた。すると為守は、「婆婆の世がわずらわしく、極楽が願わしいと思う気持ちが、日に日に強くなり、一日も早く参りたいと思ったから、このようにしたまでだ」と何度も何度も言った。人々はそれを聞いて、為守の往生を願う志の強いことに感激し、涙を流さないものはなかった。

その後少しの痛みもなく、為守は常のように念仏を続けた。七日間が過ぎても何ともなかった。そこで、これは、うがいに使っている水が腹に入るからだろうと思つて、うがいを中止して、手を清める塗香を使つたが、氣力は一向に劣えず、程なく疵もいえて、時には行水を使

うまでになった。

明けて仁治四年正月一日になった。死ななければ極楽へ往生する道はないので、為守は今までも正月一日の祝には、臨終の儀式を練習してきていて、もう長年のこととなつていた。日ごろからそうありたいと願つてやつてきたことが、今日のために延引していたのかと思ひ、よろこんでしきりに念仏をしたけれども何のこともなくその日も過ぎ、次の日も暮れてしまった。すぐ死ぬような氣持は全くない。為守は、上人から戴いたお手紙をまたとりだして、「この世のことを約束しても、立派な人は約束を違えないのが普通であるのに、まして法然上人ほどの人であるから、極楽へ往かれてからも必ず思い出し、てくれいているはずである。『極楽へいらっしゃい。そこで会いましょう』と上人は自筆の手紙を下さっているし、私は急いで参ろうと心を尽くしておりますのに、なかなかお迎えに来て下さらない。つくづくなさない」と毎日歎いていた。すると正月十三日に、来る十五日午の刻に迎えにくると上人がお告げ下さった夢をみた。為守は非常によろこんで、翌十四日には人々にこのことを話し、十五日には、上人から戴いた袈裟をかけ、念珠を



一谷保天満宮拜殿

もって、西に向い端坐合掌し、高声念仏數百返を称え、正十二時に念仏とともに息たえた。「紫雲天に願れ、異香室に見つ、茶毘の庭に至るまで、異香なほ失せず」ということであつた。

腹を切つてから五十七日、仁治四年（一二四三・二月二十五日改元して寛元元年）正月十五日、午の刻、寿八十一歳であつた。『九卷伝』は、この時為守が使つた刀につ

いて、次のような話を載せている。

熊谷入道が初めて法然上人の許へ参つたとき、もし命を捨てて後生がたすかるといふのであれば、すぐにも腹を切ろうと用意して持参した刀がある

が、念仏して極楽へ往生することができるといふことを上人よりお承いたしたので、不要となつたその刀を上人に差し上げてきた。のちに上人はそれを為守にあずけられた。為守はそれを秘藏していたが、この度、自害するに當つて、恐らくその刀を用いたのではなからうか。法然上人は、多くいる在家の弟子の中でも、自害して往生するものは、為守であらうと思つておられたのであらう。というのである。

以上が『九卷伝』、『四十八卷伝』の記す為守最後の模様である。なお、『四十八卷伝』はこのあとに、

殆信をとりかたしといへとも、かの子孫、上人の御消息ならひに念珠袈裟等を相伝して披露する事世もてかくれなし。たゞこれ尊願か不思議の奇特をのするはかりなり。余人さらにこの身行せよとはあらず（後略）

と記している。

腹を切り、五臓六腑を取り出してなお五十七日間生きていた、などという話は誰もこれを信用しないであらう。「信用しない」とは平生の知性のすることである。平生の知性で為守の往生の志の深さを知らうとすること

が、どだい無理な話なのだ。平生の知性にたよって何でも分りきろうとしていては、所詮人生の表皮をなめているに過ぎないであらう。

以前、小林秀雄氏が、「文学と自分」(昭和十五年『中央公論』十一月号)という講演で、こんな話をされたことがある。

昔、大野道賢入道という武士がいた。家康が大坂城の総堀を埋めたのをみて、家康全く和談の心底にあらず、と非常に憤って、堺の町に放火した。のちに家康にとらえられて火あぶりの刑に処せられた。真っ黒こげになった入道に検視が近づいたところ、ムクムクと動き出し、検視の脇差を抜いて、検視の腹をグサリと貫いた。その途端に真っ黒な入道の身体は忽ち灰になった、という話である。小林氏は、「この話を聞いて諸君はお笑いになります、僕はこれは本当の話だと思っています」と言われている。

為守の話もこれと変りはない。平生の知性がこれを笑おうが笑まいが、そんなことは一向にかまわない。為守や道賢の一念の中にこそ真の自由な人生があるということなのである。信じられないようなこの二人の最期だ

けをみて笑い、二人の一念に思いを寄せないならば、その人は人生の糟粕だけをなめているといわれても仕方ないであらう。

だから『四十八巻伝』がこのあとに、自害などということとは「ゆめゆめこの身行すへからず」などと書いているが、これが平生の知性のなせるわざであって、まったく「書かずもがな」のことだったのである。

さて、これで津戸三郎為守のことは終るのであるが、補遺のような形で書いておきたいことがある。親鸞聖人が法然上人の語録を集めた『西方指南抄』という本がある。その中に、先に述べた法然上人から津戸三郎に宛てた「九月十八日付」の消息があり、その末尾に、

ツノトノ三郎トイフハ、武蔵国ノ住人也。オホコ・シノヤ・ツノト、コノ三人ハ、聖人根本ノ弟子ナリ。ツノトハ生年八十一ニシテ、自害シテメタタク往生ヲトケタリケリ。故聖人往生ノトシトテ、シシタリケル。モシ正月二十五日ナトニテヤアリケム。コマカニタツネ記スヘシ

と記している。文中に「シノヤ」とあるのは「シフヤ」すなわち渋谷入道道遍のことであろうと思う(拙著「法

然」角川選書参照）が、この渋谷、大胡太郎実秀をして津戸の三人が法然上人根本の弟子であると親鸞は言っている。親鸞は、為守の自害往生のことも聞き知って、わざわざここにそのことを記したのであろう。

もう一つ付記しておきたいことは、前に谷保天満宮にある「血文の阿弥陀如来」のことを書いたが、『滝山大善寺志』は、この血文というのは、「為守京都にて腹を切其血をもて古郷の妻子の方へ文書を書いて送りたる文なりと云」と言っている。しかし、今まで述べたところからみても、為守が京都で腹を切ったとは思われない。この血文というのは、血のついた手紙ということであり、為守が切腹した後にも、上人の手紙を繰り返し読み、早く迎えに来ていただきたいと願っているのであるから、その際の血であると考えたい。とすると先に私見を述べたように、この血文は、為守の血のついた法然上人からのご消息を意味しているものであろう。

秋の谷保天満宮はまことにうららかであった。昔、神無月の十月に谷保天満宮が江戸の目白で御開帳をしたことがあった。狂歌師蜀山人がこれをみて、

神ならば出雲の国へ行くべきに

目白で開帳 ヤボのてんじん

と詠った。これよりヤボ（野暮）天と言葉が生れたという。辞書を見ると、野暮とは、世情に通ぜず、無智で泥くさいこと、と書いてある。しかし、世情にたけて、中味もないのに小才をきかせて生きている連中に比べれば、野暮な人間の方がどれだけよいことだろうか。津戸三郎為守は、誠実で野暮な天才であったと思う。

（おわり）

藤吉慈海 著

『法然上人御法語講話』上、下二巻

（上巻）B 6判 二四二頁 価一三〇〇円

（下巻）B 6判 二七八頁 価一五〇〇円

『阿弥陀経講話 附般若心経の話』

B 6判 一二八頁 価 六〇〇円

（発売元）

千112 東京都文京区本郷五一二八―四

山喜房 仏書林

振替（東京）〇―一九〇〇

浄土句集

一田牛畝選

東京 遠田念悦坊

な子が将来の楽しみである。

町騒の中に鐘きき沙羅の寺

評 東京のどまん中に沙羅の花咲き、撞く

鐘の音が聞こへて来る、この世の極楽か。こん寺の檀家は倅である。

広島 吉浦 宏栄

浮かれ猫びっこを引いて戻りけり

評 あの激しかった恋猫が、びっこを引いて戻り来た。恋に負けたのか、それでも

あるまい。精魂を使い果せし為か。

東京 栗原とも子

素直さが吾子の身上柿若葉

評 腕白でもよい、素直で健康の子。そんな

東京 鳥居 千代

銀座にも寸土ありけり若葉萌ゆ

評 一寸角は億万の銀座の真中に、若葉とはまた有難い事。その若葉の酸素吸い長

生を。

山形 松田 光馨

父の忌に父のせしごと菖蒲茸く

福岡 荒牧 還愚

僧正も着替えど、んたく見物に

福岡 高良 慈風

本山の大竹林の廊涼し

福岡 権藤みきを
石の磴仰ぐ祖廟の青葉かな

福岡 高良 幸代

転宅に心残して濃紫陽花

東京 鈴木 葉子

土少し掻きて朝顔そつと蒔く

東京 栗原やえ子

せせらぎに枝垂れ桜の影おとし

東京 田中 秀代

うかうかと刻をすごせり日脚のふ

東京 小笠原香祥

訪ふ人もなき閑地の残花かな

福岡 原 敬二郎

山独活の苦み賞でつツ駒とる

東京 外川 木居

大卯波礫を噛むで崩れけり

東京 猪瀬 幸子

山形 松田 允子

大分 丹羽 難中

通りやんせ子の声透る若葉徑

初孫を授かり糠配りけり

祖師住みし終南山は夏霞

東京 真野よし子

三重 森 静枝

福岡 国友 星畝

一人旅句に心寄せ春の月

幼児のすがりきたりし稲光

萬蒲活け客を待ちいる書院かな

東京 阪入 等達

福岡 上滝津弥音

福岡 前田 秀峰

甥の子の初の使ひや柏餅

薄幸に逝きし妹の忌額の花

涅槃変泣きくずれる阿難かな

京都 安藤 寛

福岡 服部 光代

福岡 永江 隆説

松の花法衣につけて嵯峨の僧

著我の花病後の友の指白く

僧和して楷定念仏御忌会かな

東京 吉原登起子

埼玉 佐久間愛子

埼玉 佐久間愛子

蕙坊主勢ひ揃ふて一列に

五月雨や人を待たせて狭き橋

十四日を忌日とまつる花石榴

東京 末常てる子

山口 三井 寛静

福岡 行正 明弘

家裏の枝垂桜に足とどむ

山寺の古き遍額芽木の空

男坂安居へ登る僧の杖

東京 阪入志津枝

山口 上野 明達

一田 牛畝

稽古果て門まで送る臘月

彩色の褪せたる梅雨の両大師

東京 新井 新生

埼玉 佐藤 泰子

山門に佇てば吹き来し若葉風

紫陽花の毬が水子のお地藏に

児童のための国際年

— 児童福祉と教育 —



森 邦 夫
もり くに お

(町田市福祉懇談会座長
町田市ボランティアの会顧問)

『わが子への愛を世界のどの子にも』

International Year of the Child
国際児童年一九七九年の中心先導機関
に、国連から指定されたユニセフ(UNICEF・国際連合児童基金)の事務局がきめた世界における国際児童年のキャンペーンの為にスローガンで、子どもへの愛の普遍的でなければいけないことを訴えている。

児童福祉、子ども達の幸せ、それは、子どもへの普遍的な愛情と理解である。

それが児童福祉の原点であり、児童福祉の活動の、運動の心の拠点である。

その児童福祉の充実と向上のために、今年こそ世界中の人達が、それぞれ思いを新

たにして、子ども達のいろいろの問題をもう一度見なおしてみよう、保護を必要とする子ども達への保護者の立場の大人の社会の責任や義務はどうなっているか、自分の身近なぐりだけでなく更らにその外周へも、もっと広く温かい目を向けてみようではないか、子ども達の幸せの為に、児童福祉の原点に立戻って、世界中でもう一度このことを再確認しようではないか、というのが、この児童年のほんとうの意図のようである。

一九七六年の第三一回の国連総会が、七九年を国際児童年と決めた理由は、五九年に国連総会が採択した「児童の権利に就い

ての国連宣言」から、はやくも七九年が二十周年にあたるので、これを記念してということもあるが、もっと重要な意味で、この宣言はすべての子どもが享受すべき基本的な権利を十項目に盛り定めており、しかもその宣言の前文に、「人類は子供に対して与えるべき最善のものを与えなければならぬ義務を負う」と明記されているところから、この宣言の主旨の浸透のために、児童のための国際年を設けて世界のすべての国々の、あらゆる階層の人達の注意をあらためて児童に向けさせ、児童福祉の重要性を再認識、再確認させ、この宣言の真意を行動で、世界のすみずみにまで浸透させ

《落ちこぼれ児童のいない、のびのびと子ども達が育つことのできる、児童福祉のゆきわたっている理想社会の創造》の為の一
大キャンペーンの展開を世界中に呼びかけ、訴えるのが、今年の本当の目的なのである。

x x x

今、世界の児童の人口は、世界の総人口の約三五%と推定され、その数は、およそ十五億と言われている。

そして、その約三分の二にあたる約十億の子ども達が、所謂、開発途上国といわれる産業、文化、教育などのいろいろの面でおくれている、アフリカとか、中南米やアジアとか、東地中海地域等の一部に住んでいる。しかもこの子ども達のさらに約半分に近い約四億もの子ども達が、生きる為にぎりぎり必要な基本的ニーズ（食糧、住居、医療、教育等々）さえ満足に得られない、福祉レベルの極めて低い農村地域に居住していて、いつ果てるともわからない飢餓と病魔と、そして無知と困憊の中で、憂苦と

無明の日々を救う手立てもなく、ただ、うつうつと送られていくというのだから、こんな、みじめな、非道な、信じられない現実が、同じ地球の上で、しかもこの文明の現代社会にほんとうに毎日くり返されているのだから大変である。

しかも、さらになお、恐ろしいことには、この子ども達のうちの、さらに、その三〇%近くの子ども達が、極度の栄養失調や、不治の病に冒されて、身も心もボロボロに疲れ傷つきながら、幼い尊いその生命を五歳の誕生日を迎えるころには大かたが奪われてしまふと言うのだから、想像するだけに恐ろしい。この世の生き地獄とはこのことかと、背筋に冷たいものを感じる思いさえするのである。

x x x

「あまりにも多くの子ども達が、極めてひどい非人道的な状態で放置されている。我々はこの子ども達を助ける方法が、いくらでもあることを知っているのだから、今すぐにでも、この事に就いての行

動を起こすことだ。この子ども達を見捨てておくことは、人類の最大の過ちであり、人道上もつとも劣悪な罪である」
と、ユニセフの事務局長ヘンリー・ラブリスさんは、強く途上国への援助を訴えている。

豊富な物資に恵まれて、なに不自由なく、太平な日々を送っている所謂、先進国と言われる国々の人達の中には、あるいはいるかもしれないこの現実についての切実感の希薄な人が。しかし、もし私たちがこの問題をこのまま放置し、無関心で、なんら手もたず、省みないでいるなら、それこそ人道上とりかえしのつかない最大の痛恨事として、私たちは、自らが犯せし罪の重さを、いつまでも、いつまでも悔むことになるかもしれない。

子供は自分だけでは生きてゆけない。
両親が、地域社会が、国が、そして世界中の人達が、子供が健全に成長するための権利を保障してやらなければならない

らない。国連児童権利宣言は、国連が世界中の子供の権利を守るために人類に義務を課したもので、当然、私達の子供の権利も、私達自身の義務もそこに含まれている。

児童の権利

前文 児童は身体的、精神的に未熟な為特別の保護と援助を必要とし、世界の全ての児童が幸福な生活を送り以下の権利及び自由を享有することが出来るために宣言を布告する。このためには人類は児童に対し最善のものを与える義務を有する。

第一条 すべての児童は以下の権利を、人種、皮膚の色、性、宗教、地位国籍に関係なく平等に有する。

第二条 社会に必要な一員となる機会と手段を受ける権利。

第三条 姓名及び国籍を有する権利。

第四条 社会保障及び適切な栄養、住

居レクリエーション、医療サ

ビスを受ける権利。

第五条 心身に障害のある場合、特別の治療、教育及び保護を受ける権利。

第六条 愛情と理解及び物質的保障を受ける権利。

第七条 無償の初等教育と個々の能力を伸ばす機会を受ける権利。

第八条 災害時には優先して救済を受ける権利。

第九条 あらゆる放置、虐待、搾取から保護を受ける権利。

第十条 世界の平和と国際的友情の精神のもとに養育される権利。

一九五九年十一月 国連総会採択

x x x

「光陰矢の如し」と言うが、歳月の流れはまことに早い。

あの忌むしい戦争が終ってから、もう三十四年もの月日が流れた。

今では、それを知っている人も稀だと

思うが、今のユニセフの前身とも言える(City of Nations Emergency Fund)
(Children's Emergency Fund)
国際連合国際児童緊急基金と言う、たいへん長い名称の活動団体が国連の肝入りで、一九四六年(昭和二十一年)に、第二次世界大戦の被災国(日本も含まれている)の実に数百万人にのぼると言われた被災児童達の救援を目的に創設され、ユニセフの最初の救済活動がこの時から開始されたのである。

この救済活動が始った時、敗戦のあとの焼土の中で、みじめな日本人のあの生活、住む家もなく衣替も食糧も思うにまかせず、街にあふれる戦災孤児が、米軍の残飯置場で一片のパンをあさる哀しい姿は、今もなお、腹の底に焼きついているが、そんな、どん底の日本へ当時のユニセフの温かい援助の手が潤いをもたらしてくれたことを覚えていた人が今、果して何人いるだろう。

当時の金額にして約六十五億円、この巨額の物資の援助は、実に一九四八年(昭和二十三年)から一九五七年(昭和三十三年)まで延々十年間にもおよぶ長時間の援助だったのである。

今日、我が国は世界でも屈指の豊かな経済力をもつ富裕国だと言われている。

にもかかわらず、毎年ユニセフの本部へ持ちよられるユニセフ活動に心をよせる世界の協力国のユニセフ活動資金の拠出金は、アメリカの一五〇〇万ドルを筆頭に額面順に数えて日本は十二位と世界屈指の富裕国としては僅少に過ぎる少額なので、ユニセフの本部は今年、日本に対してこの活動資金の拠出額の増加を要求していると言ふことである。

今、世界は大きく変わろうとしている、百年前の世界と違い、政治のことも、経済のことも、産業、文化、教育、医療等すべてが実務的かつ具体的に各国間の緊密な連携の中で、公平にそして厳正に協議検討され秩序ある将来の国際的な繁栄と平和を国際社会の共存の中で見出だそうと各国が意欲的に努力している。極めて重大な過渡期なのである。

駆けだしたが、日本も今では先進国の仲間入りをし、東京で開かれる先進国首脳の間上会談では主役格でその音頭をとるとい

う。ユニセフ活動の資金のことも途上国援助のことも、もっと誇りをもって対処して欲しいものだ。成りあがりだから心が貧しい、と最近外国人記者が話した日本人評だそう。

× × ×

仏教語で「般若」と言う語は仏の智慧と言う意である。凡人に対するみ仏の智慧は即ち、愛情であり、理解である、と言う。人を教え、救い、導かんとする者は、す

べからず、このみ仏の智慧を会得し自らの品性をも高めるために精進しなければいけない。

むかし、聖職といわれたころの、小、中学校の教師の仕事の範疇には、人の心を育て、人間を創る務めが含まれていたように思うが今は、それが無いようだ。

教えとは、それを説く人の人間性（人柄）そのものである、と仏典は教えている。

「恩師」という言葉はなんとも懐しくて、ほんとうによい言葉だ。言葉の中に恩愛の情が滲んでいて、教えるものと教えをうけ

るものの調和の中に無限の進歩と安らぎと愛情さえ感じる、この安らぎとこの愛情がいみじくも清く人の心を育てる原動力になるのだ。

「教育の本質」とはなにか、教えて、教え導くことだ。心なき技術者が、船を造り電車を走らすことだけが学問ではない。

今の教育界の能力偏重の傾向こそは、真の教育を冒瀆し、教育の基本理念に悖り、教育の使命を忘れ、いたづらに教育界を混沌にみちびくものでしかない。

今、我が国の就学率は九九・六％と、パーフェクトに近い、教育大国と自他ともに評しても不思議でない数字である。しかし、この数字を生かすも殺すもこれからの教育界の動向如何である。「飽食暖衣、逸居して教え無ければ、禽獸に近し」とは孟子の言だが、なにか、昨今の日本の教育界を風刺している。情緒も情操も忘れた教育は人間を創れない。

× × ×

「天衣無縫」という言葉がある。

天人の衣は無技巧で、清らかで美しい。

子どもの心も元来これである。

天心爛漫で、虚飾がない、子どもの心の本来の姿である。

こんな「心」の子ども達が、なんで「自殺」に追い込まれるのか、日本の場合、一九七〇年以降、この子らの自殺人口は世界一位と横ばいの状態のまま不名誉な記録が続いているのだ。

日本の教育界における学生と学校の関係は一番下から一番上まで、すべて受験々々で塗りつぶされているようだ。

家庭における両親と児童の関係でも、学校が対照となると違ってくる。親の「我」が、子への「期待」となり「執着」となり「慾望」となって、本来「保護」であらねばならない「指導」が、飛躍して「干渉」となり果ては「強要」となるから子どもはたまらない、心へのこの重圧が、子どもの性格によっても違いますが、いろいろの形で現れてくる。

自立心を失って自殺を遇ぶもの、反抗型で非行に走るもの、狂って兇行に及ぶもの

など、さまざまだが原因は一つである。

「天衣無縫」の子どもの心を、温かく教え育むみ仏の智慧が家庭にも、学校にも、社会にも欠落していて、この子らが愛情や慈悲に甘え、とりすがる術もないまま心への重圧がこの子らを自殺の淵へさそい込んでしまう腹立たしいような話である。

しかし、こんな悲劇も、未然に防止できないことはない。

それは、家庭における母の立場であって、母の役柄は、いつの場合でも、温かい心の相談相手、つまり、気さくな、気がねのない、どんな相談でもできる、頼れる心のカウンセラーであってほしいということなのである。

こうした役柄のお母さんのいる家庭で悲劇の起った例を未だに私は一度も聞かない。

x x x

むかし、ギリシャにアリストテレスと言う著名な哲学者がいて

「人間は天性、社会的な動物である」

と、人間の生活の社会性を肯定し、人間が、集団生活を営むことは天性であり、社会と人間の関係、それは天与の宿命であると定義した。

人間は、どんなときでも単独では生きられない。人間という文字の所以もここにある。

だから、必ず複数で生きる習慣をもっている。

そして、複数で生きているから、必然的に調和を生み、そして、その調和の中からこれもまた当然愛が生れてくるのである。

社会での調和、家庭での調和、師弟の調和、親子の調和、兄弟の調和、男女の調和等、数えあげたら限りがない、すべて複数の生活からの所産であり、いろいろに型は異なるが、種類の違う愛がこの調和には必ず内蔵されているといえるのである。

人間の歴史は古いが、それは、みんな愛の歴史である。歴史は愛でつくられたのだ。人間の天性である社会生活が産んだ、美しい愛の歴史である。

素朴で、純情で、情熱的な愛の詩で綴っ

た記紀万葉の歴史も、西洋史に見られる数々の愛の神話も、それは、みんな愛の歴史であり、その歴史は、いつも美しい愛と調和の物語だったのである。

そして、それは、いつの時代でも、共に助け合い、ともに喜び合い、ともに悲しみ合った人間の集団の愛の讃歌だったのである。

× × ×

国際児童年一九七九年も、早いもので半年が過ぎようとしている。

国連とその中心先導機関であるユニセフが展開した世界各地での精力的なキャンペーンは、吃つと立派に、その成果を各地で開花させるであらうと信じている。

かつて、わが国の宰相をつとめ、クルールな施政で一貫した、ある政治家も途上国への急援の急務であることを強調している。

現下の社会情勢の中で当然と言ってしまう。ええそれまでだが、特に児童福祉の問題を重視、これをメインテーマに児童のための国際年を掲唱し、世界に向けて一大啓蒙運動に踏み切った。この行動の意義は大きく、人類社会の将来の平和のため、最大に評価されてしかるべき年かもしれない。

× × ×

今、地球の上には、四十数億人もの人類の集団が、それぞれの集団で、明るい温かい理想の地域社会を創るために懸命な努力を続けている。ともに喜び合える、調和と愛の満ちている社会を創るために、秩序ある人類の将来の生活安定のために不断の努力が続けられているのである。

× × ×

一九八一年（昭和五十六年）は国際障害年である。

今まで、国連の企画になる国際年の設定は一九五七年の「国際地球観測年」にはじまり近くは一九七五年の国際婦人年と、その間、既に十数回に渉り国際年の行事をこなしてきている。

企画の主旨も、活動の実践も、国連当事者の努力やユニセフの参加で、過去のどの国際年の行事も、先づはそれぞれ充分な成

果を収めてきていると聞いている。

しかしながら、余りに矢張り早の計画は、かえって消化不良を招く原因ともなりかねないので、このあたりに淡い杞憂を感じないでもないのである。

たとえば、七五年の婦人年の場合にしても、七六年以後の十年間を「婦人の十年」と言って、各国ごとに行動を起こす《世界行動計画》をつくり、メキシコで開催した国際婦人年世界会議のメキシコ宣言として採択し、行動に入っている。今は恐らくその行動の真最中の筈なのである。

演し物が変わっても、役者も、舞台も変らない、地域が舞台で、役者は地域民なのだ。

この種の企画には特に無理は禁物である。このへんのところ太夫元（プロデュサー）は、充分計算の中に入れて計画しないと息切れがおこる心配もあると言うものである。

鼻もちらぬところまで堕ちた世の中だ。そう容易は改善もできなからう。

明るい世の中の再建のために、息の長い活動が必要だと思おうのである。



念佛ひじり三國志

(卒四)

— 法然もわぐろ人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

長者宗家となったわが子良経に与えるためだった。

ここに移り住んだ良経は、まず「新古今和歌集」の序文を書くことになった。序文を染筆する前に、良経は太政大臣を辞している。

良経は序文で堂々と書き切る。

九条家では「曲水の宴」を張る準備を着々と進めてきた。

「曲水の宴」とは、むかし中国で詩人が集り、即興詩を競作した故事から由来する。詩人たちは曲折の多い溪流のほとりに集った。上流から酒盃を放流する。眼下に到達するまでの間に一篇を吟じ終えるという趣向だった。吟じ終えれば拾ったわが盃になみなみと酒を汲み呑み干すのである。まことに優雅な文遊であった。

一年前の天久二年（二一〇五）九条家では中御門京極に豪邸を完成した。父兼実が配慮したもので、藤原一族の

——みずからの歌を載せること、古きたぐいはあれど十首に過ぎざるべし。しかるを、かれこれ選べるところ三十首にあまれり。これみな人の目立つべき色もなく、心をどむるふしもあり難きゆえに。かえりていずれわき難かれは森の朽葉かすつもりみぎの藻屑かき捨てずなりぬることは、道に

＜曲水の宴＞



前号のあらすじ

謡曲の「定家」は、藤原定家の式子内親王への愛執妄念を描き上げたものであるが、現実の世界でも、式子は今、九条兼実の息子良経にはるかな思慕を寄せられている。しかも良経は、その才能豊かな歌心をもって、すぐれた贈答の恋歌を式子と交わしつつある。老いたとはいえず、定家の懊悩は深く、良経の若さと才気に強い嫉妬を感じずにはいられない。こうした中で、内親王式子その人は、その衰えぬ熱情を阿弥陀如来への念仏信仰のうちに消化していたのである。式子の房号は承如房といい、例の法然上人の法語の中にみえる正如房との関わりは、判断に苦しむところでもある。しかし、歌人式子の志向する欣求浄土の思いには事実であり、薄幸な五十二年の生涯も、法然浄土教の教えに導かれて、来迎仏とともに西方へと化導されていったのであろう。

ふける思い深くして後の嘲けりをみざるなるべし

勅撰集だから後鳥羽上皇自身が序文を書くべきところだ。自分の作歌三十四首を加えたことへのテレ臭さからか。ちなみにこの勅撰集、良経は五首、定家五首、西行十三首、俊成七首、慈円九首などが数えあげられる。

上皇自身をかりて「後の嘲けりをみざるなるべし」と謙遜するわけだが、これが良経の本心だったのである

う。上皇という権力をカサにして歌道の芸術性を踏みに
じった態度への強い抗議である。

さすがに後鳥羽上皇自身も、

——みずからの歌を入れたること三十四にあまれり。
道に思い深しといえども、いかでか集のやつれを
かえりみざるべき

自作のせいであろうか、この集がやつれてみえる、と
反省する。ただしこの文章は三十年も経て隠岐島へ流さ
れたところで書かれたものだ。

序文を代筆するために、良経が太政大臣を返上した意
図も推断できるのである。

権力や政治に左右されない歌道芸術性の確立を、と九
条良経は決意したにちがいない。むしろ本質的に詩人
である彼だ。その決意を論理立った行為で表白はしない。
新邸で暮しはじめ、宏大な庭を散策しつつ「曲水の宴」
の復活を思い立ったのであろう。

復活……すでに寛弘四年（一〇〇七）三月三日、藤原道
長の土御門第で催されている。当初は烈しい風雨だった

がやがて晴れ上がり、「水辺ニ立座、下ハ土居シ、羽觴
瀕リニ流レテ唐家ノ餞ヲ移ス。衆咸懷、夜ニ入りテ昇上
ス……殿上地下ノ文人二十二人ナリ」（御堂関白記）と
その模様が述べられている。

毎年桃の節句には宮中で「花宴」がひらかれるのであ
るが、この年は大江匡房の助言もあって藤家があえて
「唐家ノ餞ヲ移シ」て曲水会というデモンストレーショ
ンに発展したのである。歌題も提示され、集った文人た
ちは思い思いに作歌し、羽觴の盃で美酒をたしなんだ。

二百年も昔に催されたこの故事を、中御門京極邸で再
現しようというのである。良経は父の兼実と相談した。

「大江家に早速寛弘の故事を聞いたぞう。これは藤家
復興のまたとない吉兆となるであらう」

兼実も強い賛意を示し、積極的に動きだした。京都の
留守宅では心もとなく、鎌倉の大江広元のもとへ使者が
送られた。

やがてその指示で南庭に池が掘られた。北庭には築山
が盛られ海辺の松が運びこまれた。勾配をつけた水溝
が、この築山から南庭の池まで巴型が伸びてゆく。これ
が曲水であった。

「こんな折に役立つと思つてな」

と兼実はある日、塗り箱を持ち出してきて良経に見せた。

「何でしようか」

「ひらいてみよ」

二十枚ばかりの酒盃が納めてあった。銀色をした異形の盃だ。

「貝で出来ていますね」

「うむ。南国からの渡来じゃ。平相国から贈られた品じゃ」

南宋との貿易が盛んだった平氏。清盛はこの珍品を藤原家との結託を策して兼実に贈っているのである。

良経は眼をうるませる。

このお盃が曲水を流れくだるさまを思ひえがいていてる。

「ところであそこじゃが」

と兼実は西方の樹林を指さした。喬木がびっしりと植えてこまれている。

「どうかしましたか」

「あの樹間に阿弥陀像を安置しようと思う。曲水会の折

には柴を焚いて、紫煙をたなびかせるのじゃ。西方浄土からの来迎仏そのままではないか」

「曲水を流れ下る貝盃、その彼方に来迎仏ですか。素晴らしい情景でございます」

良経も恍惚となった。

法然への信仰篤い父兼実は、曲水の宴をそのまま浄土曼陀羅に移しかえようと意図する。むしろ良経には反対する理由はない。

元久二年も押しつまった十二月、何度目かの使者が鎌倉から到着した。大江広元が進行中の曲水会へことまかい助言をもたらすのである。

来迎仏や浄土曼陀羅は不可。

と言って寄越した。理由は「院、ご不興ならん」である。専修念仏の徒を極端に忌避する後鳥羽上皇だった。

来迎仏なぞ配したりすると。曲水の宴をぶちこわされるであろう、という忠告であった。

嫌悪の感情だけではなかった。後鳥羽上皇はその政治上の立場からも専修念仏をきびしく忌避しようとしている。念仏者たちが鎌倉武士と結託している、と疑ぐつたからである。

「そう言えば浄土曼陀羅は、興福寺からも難癖をつけられていたのだったな」

兼実は大江広元の文を読みながら暗い顔で呟いた。

「難癖どころか、南都の三綱は顔をそろえて長兼のもとへ訴え出てきました」

良経はきわめてドライな口調で言う。

長兼とは、摂政良経のもとで内務長官のような職務（藏人頭）を果たしている三条長兼のことであった。

この元久年間、法然の専修念仏は南都北嶺の衆徒たちによってけわしくゆさぶられていたのだった。

二

比叡山衆徒による念仏停止の訴えは、昨元久元年末の「七箇条制誡」という謹慎の誓約でどうにかおさまった。ところが年があらたまった九月、こんどは奈良の興福寺が騒ぎ出したのである。

専修念仏者の異法邪義を九箇条にわたって列挙し、その断罪を宮廷に要求してきた。世にいう「興福寺奏状」である。

兼実が洩らした浄土曼陀羅はその第二条「新像を図す

る失」にあった。

これは来迎し給う阿弥陀仏の光明が、念仏する者だけを照射し、余行の天台、真言の信者たちにはわざと避けている、断効する。つまり故意にこうした浄土曼陀羅を捏造したというのである。「念仏衆生摂取不捨」の曲解だ。

ちなみに興福寺奏状は第一が「新宗を立つる失」第二、前記。第三は「釈尊を軽んずる失」第四は「万善を妨ぐる失」第五は「靈神にそむく失」第六は「浄土に暗き失」第七は「念仏を誤まる失」第八は「釈衆を損ずる失」第九は「国土を乱す失」であった。

この非難を大別すると二点で専修念仏の徒を弾効していることが判る。

一つは釈尊を中心とした仏教の、とりわけ自力修行を法然が全く否定していること。二つは奈良仏教以来この国の神祇祭神と結びついてきた思想を、神祇祭神の否定によって法然が根底から突き崩そうとしていること、以上に絞るであろう。

現実には法然は阿弥陀仏への信仰一本、他力本願を主張していたし、また神祇祭神の呪術性打破にも積極的であ

った。だから興福寺奏状の言わんとすることは筋がとおっている。

ただ他力本願の主張はともかく、神仏混合、仏教に呪術性を持ちこんだ従来の日本仏教が正しいかどうかには、第三者の立場から大いに疑わしい。

藏人頭三条長兼はこの奏状を次のような教旨で突っばねた（元久二年十二月二十九日）。

頃年法然上人、都鄙ニアマネク念仏ヲ進ム。道俗多ク教化ニオモムク。而ルニ今、彼ノ門弟中ニ邪執ノ輩、名ヲ専修ニカルヲモチテ、咎ヲ破戒ニカエリミズ、是ヒトエニ門弟ノ浅智ヨリオコリテ、カエリテ源空が本懐ニソムク。偏執ヲ禁遏ノ制ニ守ルトイウトモ刑罰ノ誘論ノ輩ニ加ウルコトナカレ（四十八巻伝）

無知邪執の門弟たちが悪いのであって、師の法然上人には全く落度はない、と言いきっている。

藏人頭三条長兼は摂政九条良経の代弁者にすぎない。こうした専修念仏教団観はそのまま良経の意志と考えて

いい。

興福寺は言うまでもなく藤原家の「氏寺」である。その宗主である良経からこうも冷めたくあしらわれたのでは、戦術の転換をはからねばならなかった。

ちなみに良経は、兼実を継いで九条家の長者になっていた。その妻は松殿基房の娘で、松殿は藤原正統の家系を九条家と両分する名家であった。

戦術を転換した興福寺側は、良経の教旨を楯にとつて新たに告発してきた。

無知邪執の門弟たちが悪いと言うのであれば、その代表者たちを逮捕処罰せよ。

良経はこの告発を握りつぶしたようである。

ところが年があらたまつた元久二年の二月下旬、院から勅定がもたらされた。

曲水の宴が間近に迫り、その準備も万端ととのつて晴れの盛儀を藤原一族をあげて鶴首しているさなかであった。

勅定は、法然の門弟中、過激な一念義を主唱する法本房行空、邪淫な六時礼讃なそ余行を興行している安楽房遵西を処分せよ、と命じている。

良經は三条長兼を招いて協議した。

「この勅定が意味するところは何であろう」

「とおっしゃると？」

「処分せよ、とは誰がどのように処分するのであろうか」

「刑罰であれば、当然検非違使の手にゆだねられます。

われらの職事を通じてくるからには、専修教団へ伝達するだけでよろしいかと存じます」

現代流に言葉をかえれば、勅定は刑事告発ではなくて専修教団内部での行政処分ということになる。

三条長兼の顔に安堵の色が流れた。

この長兼は葉室顯隆の孫で、法然と黒谷以来の門弟法蓮房信空の甥にあたる。当然、法然義の理解者であり同情者でもあった。

「つまりこの勅定で興福寺側も面子が立つと言うわけだ。抜き放った剣が鞘におさめられる。さっそう興福寺側に伝達することだな」

「はい。万事丸くおさまることでしよう」

「もともと吹毛ノ難みたいな話じゃからな」

吹毛ノ難とは、吹いた毛が傷口へはいり悪化させたぐらゐの意味で、小過を誇大に咎め立てることである。九

条良經としては、興福寺奏状を、新教団への嫉妬と自己防衛のゼスチニアによる「横車」と見とおしていたのである。

院の勅定を、事態収拾の最良策と評価した。

「明法博士をよんで勅定による処分の成文化と、興福寺側への伝達を頼む。なおその折くれぐれも興福寺に釘を刺しておくことを忘れるな、……」

と念を押した。つまりこの勅定は「興福寺奏状」に答えたものではなく、院自身の発意によるのだ、という点である。訴訟の圧力に屈してはいない事実を、衆徒側へ明確にしておく必要がある、と思った。

長兼によられた明法博士は行空、安樂房の罪状を次のように成文化している。

法本房行空は「忽ち一念往生の義を立て、ことさらに十戒毀化の業を勧め、ほしいままに念仏をそしり、還りて念仏の行を失う」とする。仏教の戒律を無視して一念義往生を主唱した。これは念仏の本旨にさえもとる行為である。

安樂房遵西は「専修と称し、余の教えを毀破し、雅軌に任せて衆善を遏妨し」とある。

どちらの文章を読んでも教団の内部問題をたてまゝ、としている姿勢が明確である。と同時に専修念仏の正当性を逆に主張してさえている文章だった。

三条長兼は興福寺の五師三綱を招いて勅定を伝達した。

今回の訴状は仏法興隆を意図したものであるから黙視しがたい。しかし法然たち念仏宗の人々の行動もまた仏法興隆のためである。考え方が異なるからと言って処罰断罪は不当である。ただし行空と安業房に関しては仏法からの逸脱、曲解の疑いがある。専修教団側へ通告して善処させるものである。ここで断わっておくが、この処置はあくまでも奏状にこたえての裁許ではない。院による独自の処断であったことを銘記しておくべきだ。

こんな趣旨を伝達した。

興福寺側も、いちおう衆徒たちを説得出来る内容だったので、つつしんでこれを受けた。

ところで専修教団側の内部処分だが、従来から孤立化し、暴走していた法本房行空は「殊に不当」として法然から破門された。安業房遵西に関しては不問に付せられた。

さて、長兼が興福寺の五師三綱に勅定を伝達したのが元久二年二月二十二日のことである。身辺の騒ぎもおさまリ、兼実、良経の父子は心おきなく曲水の宴に臨むことになった。桃の節句、三月三日まであと旬日を余すだけであった。

兼実父子は曲水の宴を張る南庭に降り立った。どこかやり残した部分はないか、最終点検でもある。

兼実は曲水の水溝をのぞきこんだ。流れの底に白い玉砂利が美しく敷き詰められてあった。

「この小石はどこから運んだのか」

良経に訊いた。

「賀茂川の上手のものです」

「そうか」

じつと眺めていた兼実は、しきりと首をかしげはじめた。

「どうか、なさいましたか」

「うむ……やはり街なかの風情じゃ。御所と変りばえがせぬ」

「御所と？」

「このたびの曲水会は、御堂関白（道長）の故事を継承

したものだ」

「承知しております」

「御堂関白は、ゆがみかかったお上の政事を正しい方向へ向け変えられた。家門の誇り、誉れはこれに過ぐるものはない」

「さようでござりまする」

良経も同調した。

藤原家の末裔にとって、御堂関白道長の存在はすでに神格化されていた。その輔弼の大業は臣下の範とすべきであった。天子の言葉といえども民心を曲げるものは、これを是正しなければならぬ。暗愚の君には帝位を退けてもらねばならない。

つまり曲水の宴復活は、この御堂関白政治への回帰をも意味していた。すくなくとも九条兼実の心底にはそんな氣おいが伏在していたのである。

三

兼実たちの御堂関白道長への尊崇の念は、実弟である慈円が「愚管抄」で筆を尽している。

御堂ノ御事、例エバ唐ノ太宗ノ世を起シテ我ハ堯舜ニヒトシトマデ思ワモ給イケリケルト申スヨウニ、御堂ハ昭宣公ニモ大職冠ニモ劣ラスホドニ正道ニ理ノホカナル御心ナリケルトミニ。我ガ威光威勢ト云エ、サメガナ君ノ御威光ナリ。王威ノスエヲ受ケテコソ、カクハアレド、私ナクオオシケルナリ。ソノ証拠ハ万寿四年十二月四日ウセ給イケル御臨終ニアラバナリ。思イノ如ク尊崇シテ多年九体ノ丈六堂法成寺ノ無善院中尊ノ御前ヲ閉眼ノ所ニシメテ、屏風ヲ立テ協定ニヨリカカリテ法衣ヲ正シクシテ、居ナガラニ御閉眼アリケル事ハ昔モ今モカカル臨終ノタメシ有ルベシトヤハ……

臨終行儀の見事さを、道長の生涯が私心のひとかけらもなく、君に忠、民を愛を惜しみなくさげた大政治家の証拠として称揚している。

このあと、三条帝をめぐる皇位継承の適切な処断を例証し、理想政治をうたいあげる。

弟慈円のこの姿勢は、兼実においても変るものではないはずであった。

〈書院の定家〉



「この小石は、院の……」

感覚ないし、象徴だとも兼実は言いたげである。

「賀茂の石ではなりませぬか」

「曲水は温故知新の流れでなければならぬ。賀茂は現実の川、汚れすぎている」

「院の……政事が、ですか」

良経は我が意を得たように眸を輝かせた。

新古今の序文を代筆する際の憤懣が頭をもたげてきたのである。

「うむ。例えば鎌倉とのことじゃ。いたずらにことをかまえようとなさる」

「……」

「専修念仏への態度も同じ。新しい民の求めにまるで眼を向けようとはなされない。専修念仏こそは、この乱世を救う唯一つの道じゃ」

「賀茂の小石にかえて、どこから採取してまいりますか」
良経は話題の転換をはかった。父の兼実に鎌倉北条のこと、専修念仏のことを余り広言してもらいたくはなかった。いかに我が邸内とは言え、後鳥羽院へ通じてゆく「耳」や「口」が各所に潜在しているのである。

例えば顔々と出入りするかつての家事藤原定家など、その代表的な人物と言えるであろう。

「そうじゃな、那智だ」

「那智……」

「那智の滝の黒石こそ、曲水の流底を染めるに最もふさわしい石であろうが」

「那智黒ですか」

良経は考えこんでしまった。兼実はすぐに読み取って、「未だ日は充分にある。そうそうに運ばせたらよい。なかに、全部を敷きつめると言うのではない。玉石を混合させてこそ、那智黒の光彩はいや増しに増す」

車一台分も運んで来れば充分だ。と言うのである。

良経は早々に那智黒石の運搬を手配させて。屈強の若者数人が、荷車を引いて南紀に立ったのは翌二十四日のことであった。

この荷車が、那智黒の小石がどんな運命を兼実父子にもたらしたであろうか。

ところで九条邸内へ出入りする後鳥羽院の「耳」であり「口」であると指名された藤原定家。

われわれは彼が書き残した日録「明月記」を重要な参

考資料として、遠い十二、三紀の時代相を汲み取ろうとしているのであるが、「明月記」は元久二年十二月三十日で筆が切れ、最も重要な部分、翌三年が、四月の分まで完全に欠落しているのである。

いや、欠落の事実がかえってわれわれにさまざまな疑惑をいだかせる。日録の筆を折ったのではなく、すでに書かれた文章を定家自身か、その子らによって破棄された、と推断できるからである。定家や末裔にとって甚だ不都合な描写があったのであろう。

欠落部分の直前、つまり元久二年の歳冬も押しつまつた記述は、いささか暗示的である。

十二月の二十四日から三十日まで、定家は連日院の御所へ参内している。多いときは日に二度も三度もである。いったいどんな重要案件があったのであろうか。

たしかにその前日にあたる二十三日、定家は後鳥羽院が風気にかかった、と示唆している。病氣見舞と言うことにもなるうが余りにもあわたしい。院だけではない。九条良経の邸も同様に出入し続ける。

暗示的の言えは、その最たるものが元久二年の最終日、十二月三十日の記述である。

卅日、天晴ル。曉、京ニ帰ル（前日、社に参じて参籠したためだ）今夜。夢ノ中ニ此ノ歌ヲ聞ク。未ダソノ心ヲ弁ゼズト雖モ慥ニ覚悟（オボ）ユルニ依リ之ヲ書キ付ク

かすみ立つかりばのをのれまぢまぢに

なごしなごしの春のあけぼの

今夜殊ニ男女ノ事ヲ思ヒテ、此ノ事アリ。申ノ時バカリニ殿（九条邸）ニ参ズ。南西ノ面ヲ御覧シ廻ス。夜ニ入りテ退出シ院ニ参ズ。亥ノ時ニ名証ヲハリテ退出ス。今日、御梳櫛、ミウチギ等アリ。事ノ外ニ御減ト云々。来タル六日、御幸始メ、即日、高陽院殿ニ渡ラルベシト云々

破乱の元久三年新春を眼前にして、歳晩の日録はこんな文章で閉じられている。

それにしても、今夜殊に男女の事を思って夢が開いた歌「霞立つ狩場の己れまぢまぢに、なごしなごしの春の曙」とは何を意味しているであろうか。ただの夢中歌とも思われない感じもする。

その男女の事を思い、という定家の深層心理に良経の

姿がちらつてはいなかったであろうか。今は亡き式子内親王をめぐるジェラシイの敵としての九条良経だ。

「明月記」が故意に欠落させている元久三年（この秋からは建永元年と改元する）の三月一日、中御門京極邸へ使者が訪れた。後鳥羽院からの使者であった。たずさえた言上は、三月三日の曲水の宴に上皇の出駕は不能、という通告だった。

その理由として、使者はおごそかに告げた。

「ご存じでもあらうが、一昨々二十八日払曉、熊野本宮が焼亡致しました」

「えッ、熊野本宮が……全く存じおらぬ」

「かかる不祥事があった以上は」

臣下の祝宴に行幸中止も当然であつたかも知れない。

（つづく）

『浄土』誌の購読希望者、新会員のご紹介を広くお願い申し上げます。四月より、新たに年会費を二五〇〇円に値上げさせていただくようなことになりましたが、なにとぞ暖かいご配慮をお願い申し上げます。

法然上人讃仰会

舞見御中署

〒170 東京都豊島区西巢鴨三二〇—一 大正大学 電話(〇三)九一八—七三一代表	〒603 京都市北区紫野北花ノ坊町九六 佛教大学 電話(〇七五)四九一—二二四一代表	学長 長谷川良昭 淑徳短期大学 東京都板橋区前野町五—三—七	学長 大橋俊有 京都家政短期大学
埼玉工業大学 松川文豪	淑徳高等学校 里見達人 東京都板橋区前野町五—一四—一	東海高等学校長 滝俊立 〒496 津島市神守町 阿弥陀寺住職 社会福祉法人 神守保育園理事長	鎮西高等学校長 真和中・高等学校長 上田祐規 熊本市九品寺三—一—一
東山学園 石井俊恭	善導大師遠忌 慶讃事務局長 法然上人降誕 漆間純成 〒530 大阪市北区同心二—四—八 九品寺中	鎌倉大仏殿 高德院 佐藤密雄 〒248 鎌倉市長谷四—二—二八	祐天寺 巖谷勝雄

舞見御中署

無量山 伝通院 住職 大河内秀敏	稲田稔界	回向院 本多清敏 〒130 東京都墨田区両国二一八—十	九品仏浄真寺 清水順碩 東京都世田谷区奥沢
蓮勝寺住職 柴田敏夫	称名寺住職 須藤隆仙 〒040 函館市船見町一八—一四 電話(〇一三八)二二—一五七八	中島真哉 青山梅窓院 東京都港区青山二—二六—三八	野呂幸進 教安寺 川崎市川崎区小川町六番地二 電話(〇四四)二二—四九四六
〒151 東京都渋谷区幡ヶ谷二—三六—一 清岸寺 原口徳正	華陽院 堀田良謙 〒420 静岡市鷹匠二—二四—一八 電話(〇五四二)五二—三六七三	近龍寺住職 松濤弘道 〒338 栃木市万町二—一四 電話(〇二八二)二二—〇八〇二	光運寺 飯田信弘 四日市市中部三—一二

舞見御中

廣隆寺住職 谷地 益雄 〒045 岩手県花巻市四日町一丁目	晴雲寺住職 塚田 弘導 〒254 平塚市立野町六一五	小林 忍戒 京都市下京区寺町 仏光寺上ル 聖光寺	北川 一有 〒111 東京都台東区鳥越二一三六 長寿院
お骨仏の寺 一心寺 高口 恭行 〒543 大阪市天王寺区隆坂上之町一五五 電話(〇六)七七一一〇三七(代)	知恩院布教師会九州支部長 聖徳寺住職 金子 貫達 〒850 長崎市銭座町四一五九	紫野 西向寺 〒603 京都市北区紫野東蓮台野町	新善光寺住職 太田 隆賢 札幌市中央区南六条
長田 善弘 今市市大桑町二七〇法蔵寺中 電話(〇二八八)二一一八二二〇	山喜房 仏書林 浅地 康平 〒112 東京都文京区本郷五一二八一四	大道 社 〒102 東京都千代田区飯田橋 一一一一六	法然上人鑽仰会

舞見御中署

東京都文京区本郷一―八―三 昌清寺	住職 服部仙順 電話(〇三)八一―一三三七	檀王法林寺 だん王保育園・児童館 信ヶ原良文 京都・三条大橋東詰	光明寺住職 白幡憲佑 横浜市南区庚台(久保山)	西住院 戸川靈俊 京都市左京区黒谷町三〇
〒606 京都市左京区西寺町仁王門上ル 専念寺	俵口隆成 電話(〇七五)七七六一―〇七七〇 七七七一―一三九〇	芳泉寺 柳楽真純 社会福祉法人大慈会・かんぎおん 〒386 上田市常磐城三―七―四八	浄土宗議會議員 安国寺住職 大田秀三 高崎市通町九〇 慈光ビル	金田明進 〒302 取手市白山二―九―二八 弘経寺

「浄土」購読規定	会費一カ年 金二、五〇〇円 (送料不要)	浄土 四十五巻 八月号	昭和十年五月二日 第三種郵便物認可	昭和五十四年七月二十五日 印刷 昭和五十四年八月一日 発行	編集人 宮林昭彦 発行人 佐藤密雄 印刷人 関 二三男 印刷所 長谷川印刷株式会社	東京都千代田区飯田橋一―十一―六 発行所 法然上人鐵仰会 電話東京二六二局五九四四番 〒103 振替東京八―八二―一八七番
-----------------	---------------------------------	--------------------	------------------------------	--	--	--

舞見御中署

総本山 知恩院 門主 岸 信 宏	浄土宗宗務庁	浄土宗宗務支所	大本山 増上寺 法主 藤井実応	大本山 金戒光明寺
大本山 百万遍知恩寺 法主 林 靈 法	大本山 清浄華院 法主 高 畠 寛 我	大本山 善導寺 法主 宮本文哲	大本山 光明寺 法主 石井真峯	
大本山 善光寺大本願 法主 一条智光	法然上人御降誕地 二十五霊場第一番 誕生寺 岡山県久米郡久米南町里方 中国従貫道路大阪より二時間	西 福 寺 稲岡覚順 川口市西川口三―二四―一三	滋賀 福泉寺 敦賀 西福寺 鵜飼隆玄	